

## 平成 30 年度 バルツァ・ゴードル事業計画

### バルツァ事業会基本理念

Life is Beautiful

ともに手をつなぎ、こころ輝く人生を創造しよう

### バルツァ・ゴードル基本方針

安全と健康を守り、快適な環境の中、人が人として豊かな生活が送れる暮らしの空間を創ります。  
最も弱い者を、一人ももれなく守る精神を貫き、尊厳をもって生きる為の権利を守ります。

### 看護療育部

#### 【看護療育部統括】

看護療育部におけるスタッフ不足に関する問題は、ホームページの活性充実化とリクルート活動により看護師確保に関して言えば安心はできないが、現在まで安定を呈している。

看護師で見るとこの3年で退職者が2名という定着率の良さも大きく関与している。

その要因の一つとして3年前より実施している、スタッフの目標面談とそれに伴って実施している研修体系が影響していると考えられる。

目標設定とそれを達成するための研修会への参加は、スタッフのやりがいや達成感を呼び起し、仕事が楽しい、面白い、自身の成長が実感できるなどの声からも、結果的に定着率へかなり良い影響を与えたと考えられた。

しかし、療育スタッフに関して、介護福祉士の見学・入職も含め2年ほど姿を見れていないのが現状で、一昨年度より病棟の療育業務を看護師が担っている。介護福祉士の養成校がここ3、4年前より定員割れを起こしているという現状からも今後の療育スタッフの確保への工夫が求められてきている。

既に数年前より無資格者・外国人スタッフの雇用を実施している施設も少なくないのが現状の中で、浮き彫りになった課題も少なくなく①無資格の就職後の教育育成体制 ②助手スタッフのすみ分け ③外国人スタッフに関しては、感性・文化・習慣。などに関する対策も必要と考える。

昨年度の新入所者の目標2名は達成できたが、1名の利用者の尊い命を失い、利用者の増員としては1名の増員に留まった。今年度も2名の新入所を目標に実践課題として持続継続は必須である。

ショート利用者数は昨年の12月でほぼ一昨年の利用者延べ数を超え、現在も多くの利用者がショートを利用している。

一昨年度からの持ち越し課題でもある①1階病棟への業務改善(レスピレータ導入) ②看護師と療育との協働業務の確立のための業務改善の完成も今年度の必須課題の一つである。

今年度も社会福祉法人として地域への社会貢献として今年度の奈良県レスパイト事業への参画をはじめ看護学校、看護大学、介護福祉士養成校、等の臨床実習の受け入れおよび各種団体よりの施設見学対応など引き続き行いながら地域が求めるニーズに常に対応を目指す。

#### (平成 30 年度看護療育部目標)

- 1、利用者を尊重した質の高い看護・療育の支援を行う
- 2、安全な看護・療育環境の整備を行う。
- 3、専門職として知識・技術の向上を図る。
- 4、コスト意識を持ち、施設運営への参画を行う

## 【外来】

今年度は1名の外来担当看護師での業務の実践であったが、・外来者への診察介助・装具・座位保持装置作成介助・制作業者と家族とのメッセージ業務などに課題もあり、今年度は各階からの1名ずつの外来担当看護師配置が必須と考える。

その他、地域や外部交流、他病院受診時の付き添など地域の交流を含めて充実する地域貢献を目指す。

## 【1階病棟目標】

1. 利用者を尊重した質の高い看護・療育の支援を行う。
  - 1) サービス支援計画に沿った支援を実施する。
  - 2) 園外活動へ、全員が参加出来るように、企画、調整を行う。
  - 3) 3大行事へ利用者全員が参加出来るように、体調管理と企画運営を行う。
  - 4) ケースカンファレンスを月2回定期的に実施する。
  
2. 安全な看護・療育環境の整備を行う。
  - 1) 月1回のインシデントカンファレンスを定着化する。
  - 2) 0レベルインシデント段階での気付き報告増え事故防止につなげる。
  - 3) 委員会活動や役割を通じて、病棟運営の活性化が出来る。
  - 4) 新人、既卒者採用時オリエンテーションを前期に整備する。
  
3. 専門職として知識・技術の向上を図る
  - 1) 看護記録の記載方法の見直しと更新を行う前期で行う。
  - 2) スタッフ各自の成長の為、希望する院外研修へ全員が1回以上参加する。
  - 3) 日々の関わりを、症例報告として1例まとめ発表できる。
  
4. コストと意識を持ち施設運営への参画を行う。
  - 1) 新規入所者2名の受け入れを進める。
  - 2) 短期入所者用病床を、年間を通じて稼働させる。
  - 3) 死蔵品の整理を前期で行う。
  - 4) SPD物品の定数見直しと、コスト意識を持ち見直し等も検討する。

## 【2階病棟目標】

1. 利用者を尊重し個別性を高めた支援を行う。
  - 1) 個別支援計画に基づいた支援活動を行う。
  - 2) 利用者の個々に合った活動を行い、楽しさを提供する。
  - 3) 表情豊かな利用者と共に歩み、看護・療育の支援を行う。
  
2. 安全・安楽な看護・療育環境を整える。
  - 1) ヒヤリハットの全員周知で同じ様な事例を少なくする。
  - 2) 利用者の細かな変化にも気づき体調を悪化させない。
  - 3) 利用者の安全を守る為に、職員の体調管理を行い、感染を持ち込まない。

### 3. 職員のレベルアップによる質の向上

- 1) 看護計画の評価と見直しを定期化し向上心を高める。
- 2) 院外研修に多くの職員が参加できるようプログラムする。

### 4. 適切な病棟運営を図る。

- 1) SPDのシールの紛失の防止に努め、無駄をなくし適正な物品管理を行う。
2. ショートステイ利用者の利用促進の為、看護・療育協同して支援を行い利用増加に努める。

## 薬剤課

### 1. 調剤業務

- ・ 整理整頓、環境整備
- ・ 作業手順を見直し、残業時間の削減をはかる

### 2. 在庫管理

- ・ 採用薬、救急カート配置薬の見直し
- ・ 散剤予製の定期的なチェック
- ・ 使用期限を定期的を確認し、廃棄を最小限にとどめる
- ・ 後発医薬品の使用推進

### 3. 病棟業務

- ・ DI 活動の推進
- ・ 薬剤情報収集を積極的に行う

### 4. 他業種連携

- ・ 定期薬を見直し、医師へ情報提供を行う
- ・ 感染サーベイランスの作成
- ・ 感染対策委員としてのスキルアップ
- ・ NST への薬剤情報提供
- ・ 褥瘡対策チームへの参加
- ・ 褥瘡対策委員としてのスキルアップ

### 5. 全国の重心施設薬剤師と情報交換を行い、専門性を高める

## 訓練課

平成 30 年度の訓練課は 2 名の常勤 PT が就職する予定であり、それに伴い新体制となる。PT、OT、ST の 3 職種が揃うので、連携と意思疎通を図りながら訓練課内の業務の見直しを進めていく。

訓練課のセラピスト全員が今後も、より良い訓練と援助を提供できるよう、訓練の質とセラピストの技術を向上するために、自己研鑽を重ねます。また、利用者様の評価や情報の共有をセラピスト同士が随時行えるよう努力します。

また、充実した訓練を利用者様一人ひとりに提供できるよう、必要な物品の充実を図り訓練に活かします。

## OT

OT としての専門性を高め、より良い訓練を提供できるよう、その都度 OT 間で症例についての話し合いを行います。それらを基に個別訓練、グループ OT、生活環境が向上するためのシーティングやポジショ

ニングの検討を行い、日常に汎化させていきます。

個別訓練では、側彎変形・拘縮などの予防や改善に向け、全身のストレッチなどを行い、身体の柔軟性を高め呼吸機能の安定を図っていきます。これら身体へのアプローチを行うことで食事や作業をしやすい姿勢につなげ、生活の質が向上するよう努めていきます。

グループ訓練では、現在のグループを引き続き行います。その中でグループの見直しと更新を定期的に行い、平成 29 年度の 3 つの課題であるスケジューリング、管理方法（備品や環境、作品）、参加者の偏り、を改善します。

課題である『スケジューリング』については、年間の予定表を作り実行していきます。『管理方法』については、環境調整を中心に定期的な整理整頓に努めます。『参加者の偏り』については、備品の拡充と、一人ひとりの能力に応じた方法を工夫することで、参加者の増加につなげます。

『クッキング』は物品の充実により参加できる（可能性のある）利用者様が増加しました。メンバーの再編などを行いながら、進めていきます。

『園芸』は様々な要因により収穫できなかった作物もあったので、作物や環境を見直し今年度も継続的に取り組みます。

『ものづくり』は、訓練の中で出来た作品を、いくつかの作品展に出品・応募することができました。今年度も継続して取り組みます。

『スヌーズレン』はレスパイト委託事業で行い、地域に対しての体験を行いました。今年度はその経験を活かし、院内でのスヌーズレンに繋げていきます。今年度も継続して定期的に取り組みます。

それぞれのグループ訓練において、記録を継続的に行い、治療効果を明確にしていきます。また、昨年より多くの利用者様が参加できるよう、機会を増やし、環境の調整を行い、訓練の充実に努めます。

## ST

利用者様 1 人 1 人の個別性が高いため、個人に合わせた介助方法の確立と統一、食事機能、食事形態の評価を継続的に行い、日々の食事を安全に過ごせるように努めます。

また、病棟職員・家族様とで情報の共有を図り、共通の認識を持てるように連携を深めたい。そのため、利用者様の变化していく個別性に対応できるよう、多職種とも密に関わっていきます。

それぞれの成長発達や、機能の維持向上のため、利用者様の自発性を引き出せるような関わりにも重点を置いていきます。

## 他職種との連携

上記支援以外にも業務等を円滑かつ効果的に実施し、利用者様の生活をよりよくしていくためにも PT・OT・ST・病棟スタッフと随時コミュニケーションを取り、密に情報の発信と共有・連携を図ります。

栄養課とは昨年度に引き続き、『畑プロジェクト』を通して、園芸で獲れた作物の加工、茶話会や喫茶店での連携をしています。

また、就学児の利用者様には引き続き授業場面の見学や参加、学校の先生との話し合いなどを行います。

## 栄養課

### <給食管理>

#### ○安定した厨房業務体制

平成 28 年度終わりに委託側厨房責任者の交代があった。また、平成 29 年度に入ってから栄養士の配置換え等があり、厨房内の従業員も入れ替わりもあった。そのことにより厨房内の雰囲気及び業務体制も良好であるとする。また、食事の提供についても安定的に行っている。このことから、平成 30 年度はゼリー食についての課題解決を共に考えていきたい。また、施設側パート栄養士の配置によりさらなる積極的な厨房への介入を行い利用者に最適な食糧展開を考えていきたい。

#### ○ゼリー食に対する課題と解決

ゼリー食を導入して 2 年が経過し、利用者の様子も変化している。その中で課題が見えてきた。ゼリー食を食する利用者は色々な意味で食事に時間をかけることが負担である。このことから、ゼリー食の欠点である“常食よりもボリュームがある”ということから利用者への負担が大きいことがいえる。この問題を解決するには厨房での様々な工夫が必要と考える。この課題を平成 30 年度は計画的に対応策を考え、実施に持っていきたい。

#### ○安心・安全な食事の提供

①厨房内の清掃業務等を明確化し、全従業員が内容を周知し、清潔を保つ。

②栄養課は厨房と情報を共有し、食べやすさだけでなく食事としての内容(見た目、季節等)にもこだわった食事の提供に努める。

### <栄養管理>

#### ○栄養(再)評価および NST 運営の継続

平成 30 年度も引き続きの栄養(再)評価については、年 3 回を目標に再評価を行うと共に書類の整備を行う。NST 運営…月 2 回の NST 検討会の資料および議事録の作成、月 1 回の NST 委員会の議事録の作成を継続して行う。

#### ○実習生の受け入れ

H29 年度より実習生の受け入れを再開した。受入中の業務は、非常に煩雑ではあるが、受け入れることによる相乗効果を大切に、厨房や各課と連携した実習時間を構成できるようにしたい。

#### ○栄養情報の発信

レスパイト体制事業を基礎に発信は行ってきたが、昨年実施できなかった園内での食品展示等の情報発信をしていきたいと考える。

## 地域支援

### 【目標】

- ・入所調整会議の定期および適宜開催
- ・障害児・者相談支援全国連絡協議会研修および自立支援協議会(相談支援部会)の参加
- ・サービス等利用計画の質の向上
- ・重症心身障害児・者レスパイトケア体制整備事業に類する事業の継続
- ・まほろばレスキュー事業の参加

### 【短期入所】

平成 29 年 2 月より、急激に短期入所の希望者が増え、新しく短期入所を利用された方は現時点（平成 30 年 2 月）において、8 名増えている（診察を受けた方は 10 名）。春先より短期入所の利用のための診察をコンスタントにおこなってきたが、まだ診察が済んでいない人が数名おられる状況である。短期入所は空床利用型であり、夏期に病棟で新入所者 2 名を受け入れたため、1 階病棟の短期入所受け入れに制限がかかったにも関わらず、現時点におけるショート利用者の実人数（169 名）、延べ人数（192 名）、延べ日数（786 日）ともに昨年を大幅に上回っている。

新しく利用された方の増加に伴い、児童の利用者が増えたため、利用希望が週末に重なったり、受け入れ時やお見送り時に職員の確保が難しい時間帯があったりと、ショートステイ利用の枠組みを変更せざるを得ない状況である。

### 【相談支援】

入所の受け入れや短期入所の受け入れに関しての相談があり、新しく入所された方が 2 名、ショート診察を受けた方は 10 名おられる。

計画相談に関しては、施設入所者が 59 名と在宅の方が 2 名となっている。最初の計画作成から 3 年が経ち、新たな計画作成する時期にあたっており、それぞれのサービス管理責任者、およびサービス担当者との情報共有が望まれる。

また社会福祉事業の本来の目的から、地域の中の施設の視点で障害を持つ方だけに捉われない支援の在り方を、「まほろばレスキュー事業」に参加する中で見出せればと考えている。